静かな世界のマエストーソ

炊飯器

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
静かな世界のマエストーソ

【Ｎコード】
Ｎ７０５７Ｕ

【作者名】
炊飯器

【あらすじ】
文明は崩壊に向かっていた。残ったのは荒れ果て、物資を食らいつくされた地球、そして点々とたたずむ街と国。
―――のはずなのに緊迫感の全くない２人は今日も旅を続ける。

アプマーシュ　1

「・・・我が名はキルケホップ。キルケホップ＝L＝ダンケシュタイン？世。我が王家に伝わる伝説の秘宝『クトゥルーの眼』を取り返さんがため、この列車に乗っている。我が運命は波乱に満ちているが、我は確信す。必ずやこの任務を遂行し、王として世を統べる存在となることを―――」

男は一人、熱弁している。長身に金髪で、フレームのない眼鏡をかけている。格好は、あろうことか白スーツである。

個室のドアが開き、少年が1人入って来た。こちらは対照的に小柄で黒髪。若さの象徴であるみずみずしい肌をしていた。

「この少年は我が従者、ナ＝ントカ。我に命をささげ、旅をともにするもの。自らの命を厭わず、我に献身する様は、さながら産まれてから共にいる踵の様だ。そして・・・」

「うざい！！」

熱弁していた男の側頭部に分厚い旅行記が叩きこまれた。

「だおおおおおお！！」

男はそのままうずくまり、涙目でもう一人を見上げた。

「なにをするのだ、我が従者！主に謀反を起こすというのか！！」

「もう一発、いっとく？」

男は軽く舌打ちをすると、硬い座席に腰を下ろした。王族が座るようなふかふかのシートではなく、あくまで木製の、申し訳程度にクッションが置かれたものである。

少年は男の向かいに座り、旅行記をパラパラと眺めていた。牛革の表紙に羊皮紙で綴られたその本は、少年が持つにはやや大き過ぎると言ってよかった。

「で、クフォン。今のは何？何の影響？」

少年は旅行記を閉じると、いまだに側頭部を抑えている男を見た。

「クフォン？・・・ああ、我をかばって銃弾に倒れた我が従者ナン

バー2の事か。ふっ、馬鹿な男だ。我に銃弾など効くはずもないとわかっていながら。しかしそれでも庇わずにいられないというのが余のカリスマ性の一端を垣間見せるな」
「一人称統一しようよ・・・・・・」
「思えば奴とは長い付き合いだった・・・。始まりは・・・・・・」
「うっざ！！」
立ち上がり、熱弁を再開した男の脛を少年が蹴る。男は再び座席に座り、右手で側頭部を、左手で脛を抑えた。
「ちょいちょいちょいちょい！！痛いんですけど！さっきからめちゃくちゃ人間の骨が露出している部分ばっかり執拗に攻めてくるんですけどこの子！！」
ついに男のキャラが崩れた瞬間だった。
列車が揺れる。男の身体は左に、少年の身体は右に少し傾いた。
「で、それで？一体何がしたかったの、クフォン？」
「クオンでいいと言っているだろう。クフォンなどという名前であったら自己紹介の度に１０回は噛むぞ」
「いや、自己紹介で１０回も自分の名前を言わないでしょ」
「えっとねぇ、クフォンの趣味はねぇ・・・みたいな感じで」
「幼少期か！」
少年はけだるそうな目で窓の外を見た。黒煙のフィルターの向こうには荒れた大地が広がっている。
「クフォっ・・・の好きな食べ物はジンジャーだ」
「くどい上に噛んだ上に好きな食べ物がマニアックだっ！」
「ふむ・・・。なかなか鋭い突っ込みだ。それでこそ我が弟子」
「誰が弟子だ！」
少年が再び旅行記を構えた。男は両手をあげて降参の意を示す。
「さっきからはぐらかされてばっかりで全然質問に答えてもらっていないんですけど」
男は上げていた手を今度は鷹揚に広げた。
「まあ、そう焦るな若人よ。お前もあと２０年したらわかる。人生

において最も大切なのは質問をすることでも質問に答えることでもなく、質問をはぐらかす時間なのだとな」
「あと２０年したら余裕で僕の方が年上だけどね。ていうかそんな意味のワカラン理論を分かりたくはこれっぽっちもないんですけど」
それを受けて男は金髪をかき上げる。
「さっきから一挙一動がイライラする対象でしかない！」
「ふう、若いなセバスよ」
「うっぜ～～～～！！」
ついに少年もキャラ崩壊をきたした。まあ、この男を前にしてのこの苛立ちは当然だともいえる。
「なんでボスはこんな男と僕に組ませたんだよ」
少年は再び窓の外を見る。今は列車がまっすぐ進んでいるため、黒煙のベールはない。ただひたすらに荒野が広がるだけである。雲ひとつない空はこの土地にとって呪うべき災厄でしかない。
「ボス？ば、ばかな・・・。あの男はとうの昔に死んだはず・・・」
「あっ、言ってやろ」
少年は意趣返しにと、男の失言を責め立てた。が、効かない。
「な、なーに。も、もも問題はなななないさ・・・」
と思いきやがっつり効いていた。執拗なほどに男は汗をかいていた。
「それで、結局冒頭部の頭のおかしい言動は何だったの？」
「夢で見た」
「さいですか・・・・・・」
男は足を組み眼鏡をずらして少年を見た。眼鏡はだてではなく、男は普通に近眼なので、少年の姿は輪郭しか見えなくなった。つまり、その行動に意味はない。
「若きセバスよ、先ほどからその分厚い本をめくっているが、そこには何が書かれているのかな？」
少年は牛革の表紙を大事そうに抱えた。
「秘密・・・」
「ふむ、そう言われてしまっては見ざるを得ないな。どれ、貸して

みろ」
「なんでだよ！ダメだって言ってるじゃんか！」
男が伸ばした手を少年が強く払った。
「ばかめ・・・。ツンデレという言葉を知らんのか。いいか、『好き』という言葉は相手が自分を好きだという事を表している。しかし、『好きじゃない』という言葉もまた相手が自分を好きだという事を表しているのだ」
「なにそのポジティブシンカーに都合のいい世界！？」
少年は旅行記を抱きしめたまま男に背を向けた。
「ふふふ。私にはわかるぞ。嫌がっているが、それは実は見てほしいのだろう？」
「そんなわけないだろ！おのれは覗きされる女性が実は覗きされたがっていると思うのか！？」
「思うぞ」
「まじかよっ！！」
「さあ、恥ずかしがることはないぞ、セバス。全てをこのクオンにゆだねればよいのだ」
「気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い～～～！！」
男の細い指が少年の肉付きの薄い肩を掴んだ。
「ひゃう！・・・やめろ、やめろ～～！！まずそのソフトタッチをやめろ！背中に指を這わせるな！くすぐったい、くすぐったいから！！助けてボス～～！！」
少年はじたばたした。
「甘いなセバス」
その隙に男は少年から旅行記を奪い取った。少年は頬を赤く染め、涙目で男を睨む。男はそんなことはまったく意に介さず、眼鏡をかけ直すと、分厚い表紙を開いた。
「む、これは・・・？」
「死ねえええええ！！」
少年は瞬時に地面を蹴り、跳び上がると、男の顔にローリングソバ

ットをかました。２人の身長差を考えると、それはあり得ないくらいの跳躍だった。
「ぐおっ」
男は横向きに倒れ、壁に手をつくことで、なんとか転倒を防いだ。
しかしその隙に旅行記は奪われ、少年は個室のドアをスライドさせると、一目散に逃げ出して行った。
「ふう、やれやれ・・・。初心な生娘でもあるまいに」
男は襟を正すと座席に深く腰掛ける。目を閉じてしばらく思案する。
「あ」
何かを思い出したようだ。
「そうか・・・。セバスは初心な生娘であったか・・・」

アプマーシュ　2

「死ね！死ね死ね死ね死ねセクハラおやじ！！ああ、もう！むしろこの世のセクハラおやじというセクハラおやじが死ね！クフォンの分まで死ね！熱湯窯の中に自ら飛び込め！！」
大声で怒りをあらわにしながら、顔を怒りで赤く染めながら、セバスは大股で廊下を歩く。別にどこへ行こうというわけでもなく、狭い列車の中なのでどこへ行けるというわけでもなく、ただ男と距離をとるためだけに歩いている。
そして、この少年。実は少年ではない。もちろん年が３０歳を越えているとかそういう事ではない。ちゃんと外見にそぐう実年齢をしている。何が少年ではないかと言うと、セバスティーナという名のれっきとした女性だという事だ。つまり、少年でも男の娘でもなく、れっきとした少女なのである。
「なんで、なんで僕ばっかりこんな目に。あんなの押しつけられて一緒に仕事なんてムリに決まってるのに。だいたい・・・・・ぶっ！」
前も見ずに歩いていたので、何かにぶつかってしまったらしい。一歩下がって顔を上げると、妙齢の女性が振り返っていた。
「ごめんなさい・・・・・・」
カールが掛かった金髪のロングヘア。大きな碧眼。真っ白なドレスがどう考えても場所にそぐわない。この列車は貴賓車などは付いていないごくごく普通の列車だ。女性は驚いた顔でセバスを見降ろしていた。どうやらセバスがぶつかったのは女性の背中らしい。女性は突然セバスの両頬を掌で包むように挟み、顔を近づけてきた。
「あ、あなた・・・。まさか私のヴァティムスファ？」
「はあ？」
意味がわからない。
「ううん。違うのね・・・。じゃあ、私のヴァティムスファ知らな

い？」
知るか～～～！セバスは心の中だけで叫んだ。
（そもそもヴァティムスファってなにっ！？そもそもそれって人なの！？）
「えっ・・・と、全然知らないですけど」
「そっか・・・」
女性はセバスから手を離すと、悩ましげな顔をした。
「どこに行ったのかしら、私のヴァティムスファ」
「えっと、ヴァティムスファっていうのはあなたの甥っ子か何かですか？」
ここで姪っ子、と言わないあたり、セバスも自分が世間からどう見られているか分かっている。少年っぽい服装といい、それはもはや諦めと言ってもいいレベルだ。
女性を見ると、ものすごく驚いた顔をしていた。
「あはははははっ！！」
と思ったら突然笑い出した。
（何この人・・・。僕？僕がおかしいの！？）
碧眼の端に涙まで浮かべた女性は指で涙をぬぐった。
「おかしなこと言うのね、あなた。ヴァティムスファはヴァティムスファでしょ？強いて言うならそうね・・・ケンベルベスかしら」
（あっ、この人電波だ・・・）
「そ、そうですか。すいません、お力になれなくて。では僕はこれで」
そう言って踵を返し、とにかく女性から逃げようとしたセバスの手首を女性が掴んだ。
「ねえねえ、いっしょに私のヴァティムスファを探してくれないかしら？」
セバスは絶望した。
「1人よりも2人の方が見つかりやすいじゃない。ね？ね？いいでしょ？」

女性は早口でまくしたてる。
「私のヴァティムスファは暗がりを好むの。噛みついたりしないから安心して。でも歌を歌ったらだめよ。私のヴァティムスファはソの音が嫌いだから。話しかけるときもソの音が出ないように気をつけてね」
（うわー！うわー！うわー！うわー！！）
セバスはその場にしゃがみこんで頭を抱えた。
（わかんない！全っ然わかんない！なにそれ！？ヴァティムスファ？強いて言うならケンベルベスで、暗がりが好きで、噛みついたりしなくて、ソの音が嫌い！？）
「えっと、ようするにあなたのペットですか？」
そう言った瞬間、女性の顔から笑みが消えた。いや、笑みだけではない。ありとあらゆる感情が消え去った。
「ちょっとあなた！保護者の所に案内なさい！！許せないわ。あろうことか私のヴァティムスファがペットですって！！」
「もうやだ、助けてボス・・・」
そうつぶやいたセバスの手首を女性が掴んだ。今度はさっきのように優しくない。爪が食い込むんじゃないかというほどの握り方だった。
そしてセバスは女性に引っ張られるまま、さっき通った道を戻って行くのだった。

アプマーシュ　3

「おお、どもったか、セバスよ」
「ど、どもってない！もどったんだ！」
どもった。
「あなたね。この子の保護者は！」
セバスを押しのけて。女性は個室に入り、男の胸倉を掴んだ。
「おっと。これはどういう事だ、セバス？私の魅力にまた一人やられてしまったという事かな？」
「んなわけないでしょ」
「あなた、名前は？」
女性は男の胸倉を掴んだまま問いかける。それに対して男は不敵に笑みを返した。
「紳士として名乗るのはやぶさかではないが、しかし、あなたも淑女ならばそれなりのたしなみというのがあるのではないのかな？よく言うだろう？人にものを尋ねるときはまず自分から、とな」
それを受けて女性は男から手を放した。
「私の名前はキルケホップ＝L＝ダンケシュタイン？世だ」
「先に名乗るのかよっ！そして自己紹介で嘘をつくな！」
男は立ち上がり、襟を正した。改めて背が高いことがうかがえる。
「現世での仮の名はクテっ・・・シフォンだ」
「自分の名前噛んだっ！！」
セバスは突っ込みを忘れない。もはや彼女はそれぐらいでしか2人についていけないからだ。
「言いづらいのでクオンでいい」
「私はエメルトニアン＝F＝シーターよ。現世での仮の名はエリザベート。エリザでいいわ」
「前半いるのっ！？」
エリザはクオンを睨んだままで、大してクオンはほほ笑んだままだ。

「そして、エリザよ。我が愚妹が何かしでかしてしまったのかな？」
「妹じゃない！そして初対面なのになれなれしい！」
「我が愚弟が何かしでかしてしまったのかな？」
「弟じゃない！」
「我が弟子が何かしでかしてしまったのかな？」
「ああもうめんどくせえんだよお前はよぉ！！」
セバスは拳を握りしめ、壁を殴った。エリザの手前、クオンを殴ることはできなかったので、精神の均衡を保つための救済措置だったが、ただひたすらにこぶしが痛かった。
「そう！あなた一体どういう教育をしているの！？あろうことかこの子、私のヴァティムスファをペットなんじゃないかって言ってのよ！！」
（いや、さすがにわかるわけないよね・・・）
そう思ったセバスとは裏腹にクオンはもう一度笑った。
「なるほどなるほど、それは失礼なことをした」
「えっ？クフォン、ヴァティムスファって何かわかるの！？」
「当然だろう、常識だ。あえて言うならケンベルベスだろう？」
「僕かっ？この場でおかしいのは僕なのかっ！？」
「そしてあなたはなぜヴァティベルベスの話を？」
「違うじゃん！！」
「へえ、合わせ技ね。さすがにその発想はなかったわ。やるわね、あなた」
「なんで！？なんでなんでなんでっ！？」
セバスはその場で地団駄を踏む。
「納得できないこと山の如しなんですけどっ！！」
「エリザどの、といったかな？さあ、掛けたまえ。よろしければ話を聞こうじゃないか」
地団駄を踏むセバスを無視してクオンは席を勧める。エリザは言われるがままにクオンの向かいに座り、クオンも座った。
「あなたなら、私のヴァティムスファを見つけてくれるかしら」

深刻な表情でそう言った女性に対してクオンは右足を高く掲げ、左足に乗せて、足を組んだ。
「馬鹿を言ってはいけない、ご婦人よ」
「二人称統一しようよ・・・」
「あなたのヴァ・・・ヴァ、ヴァヴァ」
「ヴァティムスファ」
セバスがぼそっと言った。
「ヴァティムスファはだな・・・」
「忘れてんじゃん・・・・・・」
もはや二人ともセバスの突っ込みに反応すらしなかった。セバスは唇を強くかみしめる。
「あなたのヴァティムスファはあなたに見つけてもらいたがっているに決まっている。私が見つけたところで仕方がないだろう」
「そう・・・確かにそうね」
エリザはポン、と手を打った。
「そういうことなら仕方がないわ。1人で探すことにする。じゃあ何かアドバイスをちょうだい」
それを受けて、クオンは眼鏡を取ると、目を細めて女性を見た。
「ふむ・・・、嫌いなものは何かね？」
「ソの音よ。強いて言うならソのフラット」
「そうか。ではむしろソのフラットを出し続ければいいのではないか？そうすれば怒って出てくるかもしれないだろう」
「ああ、なるほど！」
エリザは顔の前で両手を合わせると、笑顔で立ち上がった。
「ありがとう、そうしてみるわね」
扉に向けて歩き始めたエリザに、セバスは無言で道を譲った。そのセバスの鼻先にエリザが指をつきつけた。
「二度と私のヴァティムスファを馬鹿にしないでね。今度やったら許さないんだから」
「はい、すいません・・・」

わけもわからずとにかく謝っておく。エリザはソのフラットを口ずさみながら個室を後にした。
「はあ、疲れた・・・」
セバスはぐったりとした表情で座席に深く座り込んだ。さっきまではここにはもう戻るもんかとまで考えていたはずなのに、今ではもうエリザに二度と会いたくないので、ここから出ていきたくないとさえ考えている。
「時にセバスよ。１つ聞いてもいいだろうか？」
「なにさ」
クオンは絡めていた両の指を解除すると、思案するように右手で口元をさすった。
「ヴァティムスファって・・・・・・・・・・・・何だ？」
「知らんのかい！！」
全力のセバスの声は列車の音にかき消される。
窓の外に続く荒野。目的地には当分着きそうにない。

アプマーシュ　4

「ヴァ――――ティ――――ム――――ス――――ファ――――」
個室の向こう側から女性の声が響く。その呼び声の音程は単調だ。ようするにソのフラットの音でヴァティムスファを呼び続けているのだった。防音の聞いていない個室には透き通ったエリザの声がよく響いた。
「やめてくれ、もうやめてくれ！」
個室の中でセバスは頭を抱えていた。エリザが通路を通るのは7回目。今ではエリザがいなくても、ソのフラットだけはいい当てられる自信があるほどになってしまった。
「夢に出ちゃう！」
「そうわめくな、セバス。いや、セ――――バ――――ス――――」
「やめろっ！！」
「おっ、今の『ろ』もソのフラットだったな」
「うわあああああ！！」
どうやら感染してきたらしい。
「そういえば、どうしてヴァティムスファは知らないのにケンベルベスは分かったの？」
「ヴァティムスファっ！？」
突然個室のドアが勢いよく開いた。エリザが顔を覗かせている。
「今誰かヴァティムスファって言った？」
「「言ってません」」
2人の声が揃った。
「そう・・・・・・」
落ち込んだ顔とともにドアが閉められる。
「あの人怖い・・・・・・」
セバスの感情は当然と言える。それを受けて、クオンは髪をかきあ

げて、足を組み直した。
「やれやれ。まだまだ若いな、セバス。私は別に何も気にしたりはしない。美人だからな」
「お前は最低な人間だな！」
「お前の将来性にも期待している」
「殺すぞ」
「美しいニューハーフになりたまえ」
「列車の最後尾にくくりつけられたロープに足引っかけて引きずられろ。何度も言わせるな、僕は女だ」
「ふむ、そういえばそうだったか・・・・・・どれ」
「なにが『どれ』だっ！？」
伸ばされた手を全力で振り払う。どうやらこの列車の中にセバスの心休まる場所はないらしい。
「・・・いいから質問に答えてよ。どうしてケンベルベスはわかったのさ？」
強く咳ばらいをし、気を取り直し、ヴァティムスファと口走らないように気をつけながらセバスは言った。
「今誰かケンベルベスって言った？」
「「言ってません」」
どうやらどちらでも反応するらしい。
「・・・で、なんで？」
「言語とういうのは実にすばらしいな。そうは思わないか、セバス。日常生活に不可欠でありながら実に多種多様。これぞ人類が生み出した最高のツールと言っていい」
「答えやがれこのくそ紳士！！」
立ち上がり、クオンの胸倉を掴むセバス。動作は一瞬だった。
「やれやれ、カリカリしているな。そうか、そういう周期か」
「眼球全開にしたままで窓から顔出せこのセクハラ野郎ぉ！！」
「・・・そうだそうだ、思い出した。今朝食堂で耳にしたんだったか。どうだ、話してほしいか、ん？」

「まあ、それは・・・」
「そうだろうそうだろう。ちなみに私はいい加減放してほしい」
「ふん」
セバスは胸倉から手を離し、座席に座った。
「今朝の話だ。私はトーストにたっぷりのイチゴジャムを塗ろうか、ガーリックバターを塗ろうか悩んでいた。知っての通り私はガーリックの方が好きだ。しかし」
「はしょれ！！」
睨みつけるセバスに対して、クオンはあくまでも鷹揚に手を広げた。
「向かいに座ったのは初老の男性だった。ほら、前にいただろう、どこかのお屋敷の執事っぽいあの白髪頭の男性だ」
「ああ、いた・・・」
セバスは記憶をたどりつつ、相槌を打つ。職務上、記憶力は人一倍あるつもりだ。
「その男性が突然訪ねてきたのだよ。『ヴァティムスファとは何か知っておりますかな』とね」
「へー、・・・って割とがっつりした記憶じゃん。なんでさっきのさっきまで忘れてたんだよ」
「まあ、待て待て。話にはまだ続きがある」
「いや、どんな続きがあったとしても忘れる理由にはならないよ。でも何があったの？」
「そこで私はこう答えたのだ。『ヴァティムスファ・・・ケルン＝ルイユ作の小説〈ヴァティと13騎士〉の主人公でしょう』とね」
「知っっっってんじゃねえかぁ！！！！！」
本日最高記録の声量による突っ込みだった。心なしか窓ガラスが振動した気さえする。
「けほっ、けほっ、けほっ」
限界を越えて、せき込むセバス。大してクオンは実に涼しげな顔をしていた。どうやら彼の鼓膜は相当の強度を誇っているらしい。
「どういうこと！？なになに？ピエロ？僕はピエロなのっ！？」

セバスは頭を抱える。様々な感情が錯綜して、涙まで出てきた。
「なんだ。セバスは私と同じように知っていたのに知らないふりをしていたわけではないのか」
「殺してー、こいつマジで殺してー！」
どうやら自分はクオンの掌の上で踊っていたらしい事を知る。これ以上の屈辱はない。
「おちつけ、おつちけ僕」
「言えてないぞ」
「うっさい。・・・こんなのいつものことじゃないか。こんなのでへこたれちゃだめだ。僕はできる子だ。そうだ。頑張ろう」
自己暗示をかけ始めたセバス。そうでもしないとやっていられないのだろう。
「じゃあクフォン。エリザさんはさ、ヴァ・・・小説の登場人物が実在していると考えて、それを探しているってこと？それって・・・」
なかなかお近づきになりたくない人種だということになる。いや、徹頭徹尾近づきたくないけども。
「面白い人ということになるな」
「それだけっ！？」
セバスはクオンほど他者に対して寛容になれない。これは人生経験の差だろうか。
「セバスよ、世界は広いのだぞ。私は地面を掘ったら出てくる粘土の色が好きすぎて挙式しようとした人物に会ったことがある」
「うわあ・・・・・・」
「祝福した。・・・周囲には反対されて結局実現されなかったが」
「それでも引かないのっ！？」
どんだけ他人に対して寛容なのだろうか。たとえセバスが天使であってもそれは引く。

アプマーシュ　5

「ヴァ――――ティ――――ム――――ス――――ファ――――」
エリザはまだヴァティムスファの捜索を続けている。
「今の話を聞くとなんだかエリザさんがものすごく哀れに見えてきたんですけど・・・。止めた方がいいのかな」
「行ってくるといい。そして言い放て、『ヴァティムスファってい うのは空想のもので、現実にはいないんですよ。つまり、あなたがやっていることには何の意味もありません。片腹痛いので今すぐ辞めてください』とな」
「なんでそんなケンカ腰なのさ。クフォンが言ってきてよ」
「私は嫌だ。美人に嫌われたくない。胸も、あるしな」
クオンは胸の前に両手を持って行き、巨乳のジェスチャーをした。
「なんなのこの大人！列車の車輪の点検中に列車が走り出せよ、もう！」
「なんだ、お前は胸がある美人は嫌いか？」
「うるせえ！」
「そうか、僻みか」
「世界中のありとあらゆる人間に呪われろ、このくそ野郎ぉ」
一瞬にして距離を詰め、クオンの首筋に手刀を繰り出したが、止められた。
「やれやれ、そんな暴力的でどうやって嫁の貰い手を探すのだ」
「うるさい。僕は結婚なんてしない」
攻撃を諦め座席に座る。
「どうしてもというなら私が貰ってやろう」
「たとえ全世界のクフォン以外の男が全て滅んだとしても僕はクフォンとは結婚しない」
「大丈夫だ。そのうち『結婚してください』と泣いて懇願することになる」

「誰がするかっ！」
「私だ」
「お前かよっ！」
「ああ、天国のママ、もう少しだよ。彼女が成人するまで待ってるんだ」
「息子のまさかの少女嗜好に天国のママもドン引きだよ！」
「やれやれ話を戻すぞ。まったくセバスよ、お前はすぐに話をそらすのだから」
「お前の口ちぎって法廷で争うぞ！」
間違いなく話をそらすのはクオンの所業である。
「・・・・・・って僕はロリじゃない！」
2テンポ遅いノリ突っ込みだった。
「ふむ。ロリではないのか。・・・・・・どれ」
「なにが『どれ』だっ！？・・・ってさっきもやったよこのやりとり。もおシートベルトが絡まったままチキンレースやれよバーカ！」
「ヴァ――――ティ――――ム――――ス――――ファ――――」
再びエリザの声が通り過ぎた・・・と思ったら個室のドアが開き、中に入って来た。セバスはびくっと身構える。
「だめ。全然だめ。私のヴァティムスファは私が嫌いになってしまったのかしら」
突然エリザはセバスに手を伸ばした。
「えっと、ども」
てっきり握手を求められたのかとその手を握ると、ぐいっと引っ張り上げられ、立たせられた。そのまま肩を押されて窓際に追いやられ、代わりにエリザが座席に座った。
「座らせてって言えばいいじゃん！」
要するにどけということらしいが、それにしたってやり方ってものがあるはずである。
「ねえ、ほかにアドバイスはないかしら。私のヴァティムスファがいないと明日とっても困るのだけど」

「無視？なんでそんな頑ななまでに僕を嫌うの！？」
もう泣きそうだった。というか目にはうっすらと涙が浮かんでいた。
「ふむ。しかし距離を置くからこそわかるものというのも多々あると私は思うのだよ。ところで失礼ながらひとつ質問させていただこう。エリザちゃんはかの有名なバイオリニストのエリザベート＝エヴァンズであらされるのかな？」
「敬語の使い方がいまいち定まってないし、二人称は気安すぎるし言語の勉強が必要だと思われるよ」
エリザの手前声が小さくなった。いや、声が小さくなったのは泣きそうだからだ。
クオンは右手の中指で眼鏡を上げ、左手を水平に掲げてよくわからないポーズを決めた。
「なにそれ・・・。恥ずかしっ」
「ちょっといい加減になさいよ！」
エリザがキレた。セバスに対して。
「えっ・・・ええっ！僕ですか？・・・ごっ、ごめんなさい」
「いーえ、許さないわ。なんて失礼な子なの！信じられない、信じられないわ！そうは思わない！？」
「ああ思う。まるで礼儀というものがなっていない」
ここにセバスの味方はいなかった。
「ここが列車じゃなかったら窓の外に吊り下げてやるところだわ！」
「そ、そんな・・・・・・」
「おおっ、それはまさか。デカトラスの尋問方法では！？」
「ええ！そういうあなたもさっきのポーズはヘプタロッサの勝利のポーズね」
セバスは宇宙人の会議の中に迷い込んだ気分になった。言っていることが何一つわからない。
「なにを惚けた顔をしているの！？ばか？ばかなの！？」
「えっ、いえ・・・・・・ぐすん。ひっ、ひっく・・・」
ついにセバスがガチ泣きを始めた。

「あら？その嗚咽はまさかドデカティオンのあのセリフの前触れね」
「うっ、ひっく・・・ひっく」
期待されてもセバスに応えられるわけがない。
「ああ、もうなんなの！さっきから私をいらいらさせることばっかり！・・・出ていって！むしろ消えて！二度と私の視界に入らないで！！」
「うわあああああん！！」
セバスはドアを開け、勢いよく個室を出ていった。その背中に「おお、そのセリフはオクトラの母親が死んだときにヴァティムスファに言い放ったあのツンデレなセリフか」というクオンの言葉が確かに聞こえた。
明確な目的があるのか、それとも深層心理によるものか、セバスは先ほどエリザと出会った列車の先頭の方ではなく、後ろの方へと駆け出した。
ドンっ
誰かとぶつかったようだ。一瞬だけ顔を上げると、クオンが今朝話しかけられたという初老の男だった。両手で大事そうにバイオリンのケースを抱えていた。セバスはその男に構うことなく、泣いている顔を見られないように顔を伏せ、小さく謝ると再び駆け出した。

アプマーシュ　6

「間違ってる。こんなのってないよ。僕は何にも悪いことしてないのにどうしていつも僕ばっかりこんな目に会うんだよ」
場所は列車の最後尾。続く線路が作られた場所はやはり荒れた大地だし、左右から現れる新たな景色もやはり荒れた大地である。時刻は間もなく夕暮れ。少し肌寒い中、セバスは膝を抱えてうずくまっていた。
「ボスに言いつけてやる。馬鹿クフォン馬鹿クフォン馬鹿クフォン馬鹿クフォっ・・・ン」
噛んだ。
「はあ・・・・・・」
額をそろえた膝に載せる。それだけで少し温かくなった気がした。
「エリザベート＝エヴァンズといいクフォンといいなんであんな頭のネジぶっ飛んだ人ばっかりなんだよ・・・」
セバスはエリザベート＝エヴァンズを知っていた。この列車に乗っていることも知っていたし、列車でぶつかった彼女がそうであることも気づいていた。だが、今はひたすらに知らなければよかったと思っている。現実はセバスにとってあまりにも残酷すぎた。芸術家には変人が多いというのは定説であるが、それにしてもやり過ぎである。ちなみにクオンは変人であるが芸術家ではない。
「ああもうどうしよ。会社にはまだまだ全然帰れそうにないし、これ以上あそこにいると人格崩壊しそうだし」
喉が痛い。頭も痛い。早くホテルでシャワーを浴びたいし、家に帰ってゴロゴロしたい。しかし前者はともかく後者は相当先の話になりそうだ。
「これって左遷なのかなあ」
膝を抱えたままだるまのようにコロンと横になった。目じりにたまっていた涙が重力に従って流れていく。

「わあー、こんなところに女の子が倒れているよー。どーしたのかなー？」
頭上で甲高い声がする。
「きっとお腹がすいて倒れているんだよー。そうだ、ぼくたちのパーティに招待しようよ」
「そうしようそうしよう」
「ぼくたちが用意したごちそうをいっぱい食べてもらおうよ」
「そうしようそうしよう」
「ぼくたちのパーティでいっぱい楽しんでもらおよ」
「そうしようそうしよう」
「ぼくたちのパーティで腹踊りでもかましてもらおう」
「そうしようそうし・・・」
「うっさい！」
セバスは顔をあげて怒鳴った。
「わあー、きれいな子だね」
甲高い声はまだまだ続く。
「ハァ、ハァ、た、食べちゃいたいな」
野太くなった。
「エロ親父かおのれは！」
セバスの後ろに立つクオンの両手にはチーターと天使の人形が装着されていた。チーターの開けられた口がセバスの頭に襲いかかった。もぐもぐしている。
「その行動に一体どんな意味がある」
横になり、頭を噛まれたまま無表情で言った。
「うーんとねー。天使さんが食べたいって言ったからちょっと味見してみたんだ」
甲高い声に戻った。
「天使の方なのっ！？」
まさかの犯人であった。やはり世界は王道通りにはいかないらしい。
セバスは体を起こし、体育寝から体育座りになった。さりげなく目

元をぬぐう。
「何しに来たのさ」
クオンは人形を外してポケットにしまう。
「私は常に何もしない。強いて言うなら呼吸と血液循環と消化と排便とせいよくしょ・・・」
「うぜえ上にセクハラかこの野郎！」
クオンの脛めがけて裏拳をヒットさせる。クオンは悶えて座り込んだ。
「では聞くがセバス。お前は呼吸と血液循環をしないのか？」
「するよ」
「消化と排便は？」
「・・・・・・す、するよ」
「では性欲処理は？」
「だからセクハラかって！！」
今度は逆側からもう一本の脛をつぶしにかかる。
「ぐおおおおおっ！いつもいつも言うが必要なまでに私の骨を破壊しにかかるな！」
クオンは胸ポケットからメモ帳と万年筆を取り出した。
「ふむふむ、若きセバスはまだ性欲処理をしていない、と」
「屑がぁ！」
「ん？なんだ、間違っているのか？・・・そうかそうか、しているか」
「生きたまま鷲にはらわた引きずり出されろ！」
「こんなところにいつまでもいると風邪をひくぞ。それとも私に看病しろというフリか、これは？」
「たとえお前が最上の名医だったとしても僕は自分の生殺与奪をお前に握らせたりはしない！」
「ふむ、それは結構な心がけだな。風邪は引くな」
セバスの頭からクオンの白スーツがかけられた。
「くさい」

投げた。
「ありえないぞそれは！」
軽く舌打ちをしてクオンは再びスーツをはおった。立ち上がり、大きく伸びをする。
「なんとなく概要がつかめたぞ。ヴァティムスファ消失事件のな」
「最初から彼女の妄想だったってオチでしょ？小説の登場人物が現実に存在しているわけないじゃないか」
事件というのなら今回の被害者はセバス一人だ。
「いやいやそれがそうではないのだ。彼女はずっと『私のヴァティムスファ』と言っていただろう？」
「言ってたね、そういえば」
「つまりだ、彼女の所有する物、あるいは彼女と関連がある人間であると推測できるな」
「まあ、僕は最初そう思ったよ。ペットですか？って聞いたらめちゃくちゃ怒られたけど」
あれは発狂といっていいレベルだった。思い出したくもない。
「でも暗がりを好んで噛みついたりしなくてソの音が嫌いって意味がわかんないよそんなの」
「青いな、セバスよ。もっと大事なことを言っていただろう」
セバスはむっとして、しかし記憶の糸を巡らせた。しかしわからない。
「『明日とっても困る』と言ってただろう。彼女には明日何がある」
「明日って・・・ああ、なるほど！」
「そう、生理だ」
「なわけあるかぁ！お前はエロトークとシモネタなら何でもいけるローティーンズか！」
セバスの裏拳をジャンプでかわした。クオンもやられてばかりではない。
「・・・・・・明日は街に着いて、彼女のリサイタルがあるね」
「そう。つまり、探していたのは仕事のパートナーだというわけさ」

「バイオリンに名前つけちゃったのか。うわあ・・・」
「だが、ここで気になる点が二つほどある。暗がりを好むのは当然だ、木製楽器は日光に弱いからな。噛みつくことはもちろんない。だが、ソのフラットが嫌いというのがわからない。そしてもう一つ、それほどまでに大切にしているバイオリンを失くしたりするだろうか」

アプマーシュ　7

クオンが腕を組もうとした時だった。背後で扉が開いた。出てきたのは初老の男性。先ほどクオンが話していた執事っぽい男だった。
「やや、どうなされましたかな、こんなところで。逢瀬か何かですかな、おうらやましい」
セバスはイラッとした。
「はっはっは、御冗談を。私にとってこんなちんちくりんは路傍の草ですよ」
「お前は死ね！」
セバスの靴のヒールがクオンのつま先を襲った。
「ぐぎゃあああああ！」
変な声が出た。
「はっ、はっ・・・ところでご老人。ご老人はどうしてこんなところに？」
悲鳴を上げつつも紳士さは崩さない。クオンの執念が感じられた。
「ええ、私はちょっとした野暮用でしてな」
「ふーん、そっかー野暮用かぁ。背中に隠していたケースからバイオリンを取り出してー、おもむろに右手で掴みー、そのままフリスビーの要領でー・・・ってヴァティムスファ！？」
ヴァティムスファは宙を舞う・・・その直前でクオンの手に渡った。
「ほう、これは良いバイオリンですね。捨ててしまうにはもったいないのではないですか？」
「うぅ・・・・・・」
老人は唸り声をあげて膝をついた。額には脂汗が流れている。
「展開早いな・・・・・・」
唸る老人とバイオリンを片手に肩をすくめるクオンを前にして、誰にともなくセバスはつぶやいた。
「いくらだ・・・？」

「はい？」
突然の老人の言葉にクオンは目をぱちくりさせた。
「いくら出せばそれを渡す？」
老人は真剣な目でクオンを見上げている。クオンは首をかしげつつ、バイオリンを眺めた。
「なるほど、あなたはどうしてもこれを破壊したいのだと。ああ、わかりました、そうですかそうですか。さてはあなたはヘビメタロッカーですね」
「クフォンの発見は決して的を射抜かないね・・・」
セバスが突っ込むのはクオン相手だけだ。彼女は人見知りなのであった。
「いくらと言われれば私としても渡さざるをえませんね。おっと失礼、私としても渡したいとは思います」
「なぜわざわざ『わたし』でつないでみちゃった！？」
「そうですね・・・・・・2ドルで」
「安っ！？行きがけの駄賃レベルじゃん！！」
老人は怪訝な顔でクオンを見始めた。彼が真剣なのか、冗談を言っているのかを測りかねているようだ。まあ、言うまでもなく彼の人生そのものが冗談みたいなものなのだけれど。
「まあ、私の所有物ではなく、恐らくエリザのヴァティムスファとお見受けするので渡そうが壊されようが別にかまわないのですが、事情をお聞かせ願いたい。こう見えて私、好奇心の塊のような男でね。友人はみな塊男と呼ぶのですよ」
中指で小粋に眼鏡を上げた。ちゃんと様になっている所がセバスの苛立ちを加速させる。
「その呼び名は好奇心関係ないじゃん！そしてお前に友達はいない！」
「断定するなっ！」
否定したものの、その必死な感じが全てを物語っている気がした。
「仕方がない。話したら渡してくれるんだろうな？」

老人は丁寧な口調をやめたらしい。クオンを前にしてそうするのが馬鹿らしくなったというのが本音かもしれないが。
クオンはその場に体育座りした。個室ではなくここで聞く、ということらしい。しかし手足の長い大人の男の体育座りほど様にならないものはなかった。それを受けずにセバスと老人は座らない。
「私はエヴァンズ家の執事をやっているものだ。今はエリザベートお嬢様の付き人をやっている」
「セバス、セバス・・・」
クオンがセバスをつつき、呼んだ。
「なにさ、クフォン。人が話してる時は静かにって先生に習わなかったの？」
「エヴァンズって・・・・・・何だ？」
「貴様の脳みそはスポンジか何かかっ！？」
無視して、老人に話を促した。老人もクオンを無視する。
「そのバイオリンはお嬢様の亡きお父上がお嬢様に贈られたものでな、お嬢様はそれはそれは大事にしていた」
「それなのになんで・・・」
「壊れているからだ」
言われてセバスはクオンが大事そうに、まるで最愛の女性の様に抱えていたバイオリンを見た。専門家でも何でもないセバスにはかなり古くて傷んでいる、ということしかわからなかった。
「本来楽器は定期的にメンテナンスをしなければすぐに音が狂ってしまう。しかしお嬢様はそのバイオリンを片時も手放そうとせず、あまつさえ名前をつけ、その日のテンションによっては一緒に食事まで取ろうとなさる」
「うわあ・・・・・・」
本気で救えない気がしてきた。あるいはこの場合、報われない、とでも言った方がいいのかもしれない。
「あれ？ていう事は『ヴァティムスファはソの音が嫌い』って言うのは・・・」

「そう、ソのフラットが出ない。どうしても半音下がってしまう。それなのにお嬢様はどうしてもこのバイオリンでコンサートに出るといって聞きわけになられないのだ」
「・・・・・・」
セバスは言葉が出なかった。何というか、あきれてしまって。
「それでご老人はそれを壊すことで未練を断ち切ろうと？」
黙って聞いていたクオンがふと口を開いた。
「そうだ。さあ、事情を話したのだから渡してもらおう」
老人はいつの間にか胡坐をかき、前髪をいじって遊んでいるクオンに向かって手を伸ばした。
「・・・・・・」
クオンはその指先をなめまわすようにじっと見つめる。それどころかあまつさえ舌を出した。
「なめるなよ」
「なめないさ。若きセバスの白魚のような手であれば私の唾液で余すところなくなめまわすことも吝かではないのだがね」
セバスは自分の発言に激しく後悔した。
「ご老人。いや、ここはあえてこう言わせてもらおう。ご神木」
「なんでっ！？」
「あなたの望みはかないそうにはありません。つまり、私はこの彼女のヴァティムスファをあなたに渡すわけにはいかない」
「なにっ！話が違うぞ！」
「話の１つや２つ簡単に違えますよ、私はね」
クオンはゆっくりと立ち上がり、前髪をいじっていた手で老人の背後を指差した。
「美人のためですから」
驚いて老人は振り返る。

アプマーシュ　8

「お嬢様・・・・・・」
そこにはエリザの姿があった。怒りや困惑といった者はなく、笑顔でヴァティムスファだけを見つめている。
セバスはさりげなくクオンの陰に隠れ、エリザと向かい合わないようにした。先ほどのトラウマはいまだ記憶に新しい。
「ありがとう、私のヴァティムスファを見つけてくれたのね。さあ、私にちょうだい」
老人は固まっている。セバスは隠れている。だからエリザの笑顔に答えたのはクオンの微笑だけだった。
「我は確信す！我は天寿を全うしたのだと。ゆえに我は思うのだ。我の余生は次なる戦士を育むためにあるのだと。我は死なない。全てが終わった後でも生き続ける。だからこそ、我はその人生に意味を求めなくてはならない！」
突然クオンが叫び出した。セバスはついにクオンの頭がいっちゃったのかと頭を振った。
「そ、そのセリフは。終章でのヴァティムスファの最後のセリフ・・・！」
エリザは半歩下がった。クオンはエリザにバイオリンを差し出した。
「あなたのヴァティムスファからはそんな声が聞こえてきた気がするのだよ、私は」
「・・・そうなのかしら。私はずっと彼に戦っていてほしいのだけれど」
エリザは首をかしげる。クオンはその胸にバイオリンを押しつけた。エリザは黙って自分のヴァティムスファを見下ろした。
「そうなのかな。・・・ねえ、爺や、そうなのかな？」
女性の関心がようやく自分のヴァティムスファ以外に向いた。しかし老人は答えることができなかった。エリザはその老人からケース

を取ると、バイオリンをしまった。
「わかったわ。私には声が聞こえないけど――――バイオリンの声が聞こえるとかさっきから何言ってるかさっぱりわからないけど、彼は疲れてるみたいだから休んでもらうことにするわ」
バイオリンケースを大事そうに胸に抱え、エリザは去っていった。
老人も後を追う。扉は閉められ、そこにはクオンとセバスだけが残った。
「えっと、さ・・・こんなところにいると風邪ひくよ」
と、今しがた配慮から言ったセリフに対して「いや、意味わからない」と言われたクオンに優しく言ってみた。
「ふう、ツンデレか」
「そのポジティブマジうぜえ！」
クオンは襟を正し、眼鏡を中指で上げると、髪をかき上げた。軽く一回転をして、扉を開けた。
「帰るぞ、セニョリータ」
「お前もう帰れ！」
ストレスの溜まり過ぎでもう心の中に潤いは残っていない気がする。
セバスは扉を後ろ手で締めながらそう思った。

アプマーシュ　9

「明日はやっと駅に着くのか。なんでこんなにしんどいんだろう」
「なんだ、今日は2日目か？」
「死ね」
夜になって、窓の外はただの闇になった。しかし、見えたところでどうせ荒野が続くだけ。さしたる意味などないのだから何も考えることはない。
「私は楽しいぞ。生きているだけではにかみ笑いが止まらない」
「軽く病気の域だな」
「陽気だから陽性なのだ」
セバスは旅行記を開き、何かを書いている。
「そうだそうだ、さっきから聞こうと思っていたのだ。どうしてその旅行記は白紙だらけなのだ？てっきり恥かしいことが網羅されているかと思いきや、何も書いていなかったのでつまらなかったのだが」
そういうクオンに対して、セバスは旅行記を高く上げ、顔を隠した。
「どうしたセバス？何を書いたのだ、見せてみろ」
「いやだって言ってんじゃん。プライバシーの侵害だ」
「なにを言うか、私たちの間にプライバシーなどあっていいわけがない。さあ、全てを共有しようではないか」
「なんだよ全てって、クフォンと分け合うものなんて何にもないよ」
「いいではないか。主に下着を共用しようではないか」
「どんだけ頭わいた変態だお前はっ！」
「私はTバックなるものをはいてみたい」
「気持ち悪い！だいたいそんなものはかないし！」
「なんだ、かぼちゃパンツ派か」
「はくかっ！」
「話がそれるなまったく。そうそう、秘密を持つのは互いのために

よくないという話だった」
クオンは立ち上がる。セバスは嫌な予感がした。
「さあ、見せてみろ。私が文章を添削してやろう」
「僕が旅行記をどうかこうが僕の自由だ！」
「そう言うな。さあ、おじさんにすべてを委ねればいいんだよ」
「セクハラおやじ！・・・やめろ、やめろやめろやめろ！！ひゃっ、やっ、やめ・・・」
「んん～？セバスは脇が弱いな～」
「やっ、ちょっ・・・ひゃん！」
「ふはははははは」
旅行記が奪われた。
「なんだ、ずいぶんつまらないな。これではただの出来事の羅列ではないか。その時に自分が何を思ったか、それが重要であるのに・・・」
「地獄に堕ちろくそごみやろぉぉぉぉぉぉ！！」
セバスは右足でクオンの左膝を踏み、左膝をクオンの顎にクリーンヒットさせた。
それはすなわち・・・シャイニングウィザード！！
床に倒れ、悶えるクオンの腹に追い打ちとばかりに蹴りをくらわせ、旅行記を抱きしめるように抱えると、個室を飛び出した。

「死ね！死ね死ね死ね死ね！！むしろ僕とボス以外の全人類が死ね！箱舟を残して地球は水没しろ！！」
こうして若者の心は荒んでいく。この場合、責任が誰にあるのかは言うまでもない。
ふと、大股に進んでいたセバスの足が止まった。今度は誰かにぶつかったわけでもない。夕食が終わったので、客は皆個室に戻り、明日に備えて眠ったり談笑したりしているのだろう。セバスの視界には誰もいなかった。セバスの足を止めたもの、それは旋律だった。
「バイオリン・・・？」

どこかの部屋から響くバイオリンの旋律。それが通路いっぱいに広がって、セバスの心を震わせた。
「ヴァ――――ティ――――ム――――ス――――ファ――――」
覚えている音でソのフラットを出してみる。それに合致する音が確かに聞こえてくる。それはつまり、引かれているのはエリザベート＝エヴァンズのヴァティムスファではなく、別のバイオリンだという事だ。
「なんだっけ、この曲」
何度も聞いたことのある曲だったが、それだけにタイトルが出てこない。セバスは目を閉じて聞き入った。
「パッヘルベルの『3つのバイオリンと通想低音のためのカノンとジークニ長調』第一曲だな。通称『パッヘルベルのカノン』普通3つのバイオリンで追いかけ合うように演奏されるのだが、1つのバイオリンでここまで表現できるとは、見事だ」
いつの間にか自分の右後ろに会った気配に対して、セバスはひじ打ちを食らわせた。
「うっ、ぐっ・・・」
先ほど思いっきり蹴りを食らった部分なので効果覿面だった。セバスは振り返り、左手で痛みに屈んだクオンの前髪を掴んだ。
「せめてなんか喋ろうっ！？」
右拳を掲げたセバスにクオンは懇願する。彼の身体は悪ふざけの末にボロボロだった。
「ふん！クフォンなんか軽犯罪で投獄されて無念のうちに衰弱死すればいいんだ」
髪から手を放す。クオンは背筋を伸ばし、襟を正した。
「ムキになるところがかわいいな、セバスよ。つまんでもいいか？」
「お前は本当にもう救いようのない大人だな！」
「自覚はしている」
「改めろっ！」
「やーだー」

「子供かっ！！」
バイオリンの音が止まった。セバスの左側の扉がスライドして開き、真新しいバイオリンを手に持ったエリザが出てきた。
「あら、いたのね」
「おお、エリザ！君を誘おうと思ってね。街に着いたらディナーでもいかがかな」
「いやよ、だってあなためんどくさいもの」
即答だった。
セバスは噴き出した。その瞬間エリザの視線がセバスの方を向いたので、慌ててクオンの背後に隠れた。
「ふふ、女心と秋の空というからな。気が変わったら言ってほしい。ではもう一曲お願いできるかな」
「それならいいわよ」
エリザはバイオリンを構えた。プロなのに随分と出し惜しみをしないんだな、とセバスは感心する。
通路に旋律が溢れた。
ブラームス『アヴェ・マリア』
「すごい・・・・・・！」
いつものほほんとしている、というかぶっとんでいるエリザのまるで別人のような魂のこもった演奏。旋律に色があるとしたら黄金色だろうか。その色は荒みきったセバスの心に確かに潤いを取り戻させた。
曲が終わって、旋律が止まった。エリザが息をはいて、バイオリンを体から離すまで、セバスは身動き一つできなかったし、クオンは目を閉じたままだった。
「素晴らしい演奏だ。感謝する」
拍手喝采。・・・といっても2人だけだが。
「そうだ。1つ聞きたかった。どうして君はバイオリニストをやっているんだ？この時世に旅を続けるなど危険以外の何物でもないのに」

眼鏡を中指で上げながらクオンは尋ねる。対するエリザの答えは単純明瞭だった。
「好きだからよ」
笑顔とともにエリザは言い放った。
「なるほどそうか。ありがとう、では私たちはこれで失礼する」
「ええ、さようなら」
「さようなら」
最後にセバスも言葉を返した。それに対してエリザが激高することはなく、胸をなでおろした。

アプマーシュ　１０

「すごかったね・・・」
個室に帰る途中でセバスはクオンにそう言った。
「私がか？」
「お前じゃねえよ！」
折角戻ってきた潤いがまた乾いていく気がした。どうしてこの大人はこうなのだろうかと首をかしげた。
「うん、いい記事が書けそうだ」
部屋に戻ると、旅行記に書き込みを始めた。書きたいことが多すぎてなかなかまとまらない。
「まじめだな、セバス。そんなもの本社にいる連中に任せればいいだろうに」
「僕は記事が書きたくて新聞社にいるの！クフォンはどうだか知らないけどさ」
そう、２人は新聞社に勤務している。それがどうして列車に乗っているのかといえばなかなか深い事情があるのだけれど。
「まあいい。それより明日は街に着く。私は寝るぞ、おやすみ」
クオンは座席に横になる。
「いやちょっと待て、ここは僕が寝るから出てってよ！」
「くかー」
「そんなわざとらしい寝息を立てるな！」
クオンは目を開け、横になったままセバスを見た。
「朝から晩まできゃんきゃんとうるさいやつだな。細かいことを気にするな」
「細かくない！僕の貞操の危機だ！」
「そうか、セバスはまだ処女か」
「ゆりかごから墓場までセクハラかこの野郎！いいから出てけよ！」
「えー、いいじゃん、いっしょに寝よーよー」

「かわいく言ってもだめなものはだめっ！昨日みたい食堂車で寝ればいいだろ！」
「ひどい女尊男卑だな。世界中の男に恨まれるぞ」
「望むところだ！」
「まあ、私だけは味方してやる」
「いや、クフォンだけはマジでいらない。いいから向こうへ行ってよ」
しっしっ、と手を振る。
「おいおいそんなことを・・・くかー」
「だからそんな寝息はフツー立てないんだよ！」
反応はない。
「おーい、クフォン。早く出てってよ。僕が寝れないじゃないか。ちょっと・・・マジで寝てる？・・・・・・起きてよぅ」
返事はない。
「えー、ちょっと、どうするのさ。僕だって明日早いんだから寝たいんだけど」
返事はない。
「どうしよ・・・・・・」
人見知りのセバスにはほかに頼れる人がいるわけもなく、クオンがいつ目覚めるかわからない状況で熟睡もできなかったのは言うまでもない。

ゲメーシッヒ　1

「よし、今決めたぞ。今日の私の口癖は『それでも私は、やってない』だ」
「痴漢をする予定でもあるの？」
「なにを言うか。むしろ痴漢をしない予定というのが意味がわからない」
「いや、クフォンがいままでちゃんと生きてこられた意味がわからない」
もう今日中に死のうよ、とセバスは言った。場所は食堂車。クオンはトーストにマーガリンを、セバスはジャムを塗って頬張っている。セバスの目の下にはしっかりとしたクマが刻み込まれていた。
「やれやれ、セバスよ。テンションが低いな。街に着くから浮かれてしまって昨夜は眠れなかったのか？まったく、仕事なのだからいい加減にしろ」
「お前にだけは言われたくない！だいたい僕が眠れなかったのはクフォンがいたせいだ！」
「やれやれ、私も罪だな。そばにいると意識させてしまうというのだから。だが安心しろ。お前を迎え入れる準備はいつでもできている」
「僕は今夜中にクフォンを抹殺する準備を仕上げておくよ」
きっと睨みながらジャムトーストを頬張った。周囲には誰もいない。街へ着けばおいしい料理が食べられるのだからわざわざここで食べようなどというもの好きは2人だけの様だ。
「大体何か起こっても大丈夫だ。私はこういうからな、『それでも私は、やってない』」
「朝起きたら蠅になってカメレオンにでも食われろ」
「ふむ、カメレオンか。あの色彩を自在に変えられる能力はぜひ仕事に生かしたい」

「へえ、ちゃんと仕事する気あったんだ。張り込み、とか？」
「ああ、風呂のな」
「少しでもクフォンを信じた数秒前の僕を張り倒したい！もう僕の視界から消えろよ。僕の情操教育に悪すぎる」
「だが性教育にはうってつけだ」
「朝っぱらから何回も言わせるな、死ね！」
ジャムを軽く掬ってスプーンをふるった。今日も変わらないクオンの白スーツにダメージを与えようという魂胆だ。
「ぬるい」
ナプキンに阻まれた。
「私のスーツ００５、通称『エバー』に穢れをつけるならばもっと腕を磨くことだな。ふわっはっはっは！」
セバスは屈辱に肩を震わせた。しかしこれ以上貴重なジャムを無駄にするわけにもいかないのでここは大人なセバスがこらえるしかない。
「む、なかなかうまいな、これは」
顔を上げるとクオンがナプキンをなめていた。長身で金髪で眼鏡の傍から見ると紳士であるクオンのその姿はなかなか異様だった。
「どうした、なめたかったのか？ほら」
「うわっ、近付けるなっ！」
そのナプキンに付着しているのはもはやジャムではなくクオンの唾液である。忌避すべき対象以外の何物でもなかった。というわけでセバスは椅子ごと身を引いた。
「なにするんだよ、殺す気か！？」
「いや、死にはしないだろう。私の唾液は一種のフェロモンさえ分泌されているのではないかと昨今の研究者の間では話題沸騰の代物だぞ」
「その頭のおかしな研究者たちを僕の前に連れてこい！全員正座させて説教する」
「あれは・・・そう、夢の話だったか。では私と寝れば共有できる

かもしれないな」
「できるかっ！」
「できないな。残念だ。セバスの胸筋がどこまで成長したかチェックしてやろうと思ったのに」
おぞけが走った。
「ん？どうした？例の胸の前で両掌を力強く合わせるトレーニングは胸筋を鍛えるものだろう？」
「え・・・？見てたの・・・・・・？」
胸の前で両腕を力強く合わせる体操。世にも名高いバストアップ体操なのだが。
「う、嘘だ！あのときは誰もいないことをちゃんと確認して・・・。待って！待って待って待って待って！・・・いやいやいや、そんなはずはないんだ。僕はちゃんと確認したんだ」
セバスは混乱している。
「まあ、トレーニングは悪いことではあるまい。かく言う私もセバスには負けられないと日夜胸筋を鍛えているぞ」
クオンはよくわからないフォローをした後、意味のないバストアップ体操を披露した。その動作はセバスを追いこむ結果以外に何も生まないことなど知る由もない。
「そうだ。そんなはずはないんだ。そっかぁ、これは夢かぁ」
ものすごく安心した笑顔とともにセバスは壊れた。見られたのがよほどショックだったらしい。
「あー、あー、あー・・・うわあー！！」
やっぱり立ち直れないらしい。セバスはふらふらと立ちあがった。
「どうしたセバス？その行動理由を逐一私に報告しろ」
「なんで僕はクフォンにプライベートの全てを握られているのさ。寝る。寝てくる。不貞寝する。鍵かけるから入ってこれないよ。着いたら起こして」
「ふむ、その疲れた様子・・・。2日目か。まあ、だとすれば男である私に辛さを共有できるわけではないのだから許そう。鉄分を多

くとれよ」
セバスはふらふらと歩き、クオンの背後で首筋に一発手刀を決めた後、食堂車を後にした。
クオンは首筋から来る頭痛にしばらくさいなまれた後、顔をあげて紅茶を口に含んだ。
「ふむ、若いな。まあ、若いのはよいことだ」
クオンはちらと窓の外を見た。もうすぐ街に着くというのに荒れ果てた大地は変わらない。植物も鳥も獣もおらず、ただ乾いた大地と武骨な岩だけが延々と続いていた。
「これが人のカルマ、か・・・」
クオンはいつになくまじめに呟いた。セバスが聞いていたら雪でも降り出すんじゃないかと心配するのかもしれない。
「よーし、街に着いたら・・・『それでも私は、やってない』を10回は言うぞ」
元に戻った。どうやらクオンには2秒以上まじめでいるのは不可能らしい。
「さて、と・・・」
クオンはおもむろに立ち上がった。大きく伸びをすると天井に手が届きそうだ。もちろんさすがに届くことはないけれど。
「夜這いならぬ朝這いをかけるとするか」
最低なセリフを1人ごち、クオンは食堂車を後にした。

ゲメーシッヒ　2

「ああ、眠いしんどい辛い気が重い・・・。もう限界だ。街に着いたらやっぱりボスに手紙を出そう。さすがに無理。あれ、ムリ」
個室に鍵をかけて座席に倒れ込んだ。対して柔らかくもないので寝心地は全くよくないが、それももう慣れたものだ。つまり、慣れるくらいまではセバスも頑張ってみたのだが、やっぱり無理だったという話だ。
「トイレ・・・・・・」
セバスは独り言が多い。それは十分に自分でも自覚しているのだけれど、どうしても治らない。人が周囲にいるときはできるだけ出さないように気をつけて入るのだが。
愚鈍な山の様に向くりと起き上がり、ふらふらとドアに近付いて、鍵を開け、スライドさせた。
「ぴぎゃあああああ！！」
そしてこちらを覗きこむようにかがんでいた碧眼と目が合った。
セバスはあわててドアを閉めようとしたが、がっちりと指を間に差し込まれ、こう着状態に陥った。それも一瞬で、力の差によってすぐにドアは開けられ、金髪の男が入って来た。
「ヘイ、ボーイ。ユーアーベリーキュート。オジサント一緒ニ、イイコトシマセーンカ？」
セバスは神を呪った。
「今度は何キャラだ！そして僕はガールだという事はその空っぽの脳みそに直接語らないとわからないのか！！」
「パードゥン？」
パードゥン？＝Ｐａｒｄｏｎ？・・・「もう一度言ってくれませんか？」
「うっぜえええええ！！」
外人のホモキャラ気取りのクオンはそのまま座席に腰を下ろした。

セバスにはもはや殴る気力もない。
「ああ、もう！超能力を手にしてすれ違うすべての人を不幸にしたい！！」
傷ついたティーンズの心はもはや修復不可能だった。
「そう言うな、セバスよ。いいから私といい事をしようではないか」
「誰がするか、この変態！！」
「変態？何を言っている？私が言っている『いい事』というのは拾った財布を持ち主に返したり、迷子の子供をあやしたりという意味だぞ？」
「ぐ・・・・・・」
不覚だった。
「ふふふ。それとも何かな？セバスはそういうエロティックな妄想をしたのかな？」
「ぐぐぐ・・・・・・」
唸り声しか出なかった。
「やれやれ。これだから多感な思春期の子供は困るのだ。エロは地球を救うと勘違いしているのだから」
「・・・・・・・・・・・・」
涙目になってきた。
「これからはセバスに対する認識を改めなければならないな。そうボスにも報告しておこう」
「・・・・・・・・・・ぐすっ」
泣いた。
「もっ・・・やだ・・・・・・」
セバスは心身ともにボロボロになり、立ち尽くすことしかできなかった。
「もうやだー！」
「あー・・・」
ここに来てようやくクオンは罪悪感を感じたらしい。
「冗談だ。私はエロい意味で言った」

が、フォローの仕方が間違っていた。
「思春期の少年少女がエロいのは当然だ。さもなくば人類は滅んでしまう。だからセバス、お前も自分を誇っていい」
どこまでも間違っていた。
「まあまあ、座れ。少し真面目な話をしようではないか」
フォローに限界を感じたので話をそらした。目じりに当てていたセバスの右手を掴み、座席に座らせた。セバスは抵抗なく座る。どうやらもうトイレに行く気力もないらしい。
「もうすぐ街に着く。だから私は荷物をまとめに来たのだ。お前も眠たいのはわかるが街に着くまで我慢をしておけ」
「うん・・・・・・・・・・・・わかった」
涙をぬぐいながらこくりとうなずいた。気力もないし、まじめな話なので普通に素直だ。
「とりあえず私は取材に行くがお前はどうする？別にホテルで休んでいてもいいが」
「えっ・・・・・・」
セバスは驚いて顔を上げた。ちらっと窓の外を確認する。雪は降っていない。
「えと・・・誰、ですか？」
「それはどういう趣旨の質問だ！？」
さすがにクオンも声を荒げた。浮かしかけていた腰を再び座席に戻す。
「まったく。これからセバスの私に対するイメージについて真剣に話し合う必要がありそうだ」
「変態」
「いささか的を外した答えだな。私はパピヨンの幼虫ではない」
「うざキャラ」
「感受性と耐久力の問題だ。私ほどの男であれば、私と一緒に暮らしたところで夫婦仲良く幸せになれるだろうよ」
「・・・・・・」

返事が途切れた。クオンが顔を上げると、セバスは旅行記を抱きしめたまま瞳を閉じ、薄く寝息を立てていた。
「結局寝るのか・・・。まあ、夜更かしはお肌の天敵だからな」
クオンは黙々と荷物をまとめ始める。途中で気付き、セバスにスーツのジャケットをかけた。あらかたまとめ終えると、横になって二度寝を開始する。理由は簡単。食後の睡眠ほど気持ちいいものはないからだ。

ゲメーシッヒ　3

「すいません、お客さん。もう到着しましたよ」
深い睡魔の中から誘い出されるような感覚とともにセバスは目を開けた。目の前の知らない男がこちらを覗き込むようにして立っていた。
「えっ、あっ・・・はい」
格好からして間違いなく車掌だろう。セバスが反射的にそう答えると、車掌はにっこりと笑って個室を出ていった。
「ええっと、街に着いたのか・・・・・・」
セバスは立ち上がり、状況を見まわした。
向かいの席ではクオンが眠っていた。
「うわー！うわー！うわー！うぎゃあああああ！！」
セバスは叫び声を上げた。それによってクオンは飛び起きる。
「なんだ！？ついに隣国、クモノヴァルスが攻めてきたのか！？」
寝ぼけていた。顔をあげてセバスを見ると、こちらを指差したまま口を大きく開けていた。
「な、な、な・・・・・・」
「どうしたセバス？・・・・・・・む、もう到着したか。早く荷物をまとめろ」
「なんでクフォンが僕の向かいで寝てるんだよっ！！」
セバスの額から汗がだらだらとあふれ出した。とりあえず服の乱れがないことを確認する。何故かクオンのジャケットが足元に落ちただけだったので、クオンに気付かれないように安堵の息を漏らした。
「なんで寝ているかと聞かれれば、応えて見せよう。夢の中で美女が私を待っているからだ」
「ついに病気の域だよこの人！！」
ジャケットを投げつける。相変わらず白いそれをクオンが掴んで腕を通した。

「そんなんじゃない！どうして僕が寝ているのに出ていかないのか、という話をしているんだ！」
クオンは両掌を上に向け、首を振りながらふーっと息を吐いた。
「ぬかしおるぞ、この少年」
高飛車にセバスを指差し、クオンは言う。
「少女だ！」
「ぬかしおるぞ、この処女！」
「聞き間違えるな！殺すぞ！！」
「世界最強の紳士たるこの私が鍵の閉まっていない個室に眠っているセバスを残したまま退散できるわけもないだろう」
「・・・それはそうだけどさ」
つまり、セバスの不覚ということだろう。しかし昨日は一睡もしていないのだから仕方ない。セバスの睡眠欲は普通に普通だ。
紳士云々については突っ込まない。めんどくさいから。
「だから私はひとしきりセバスの赤子の様な寝顔を堪能した後、やることがないので寝たのだ」
「気持ち悪い！よだれを拭くしぐさをするなっ！」
「すいません、急いでくれませんか」
「あっ、ごめんなさい車掌さん！」
セバスは慌てて片付けを開始する。どうやらセバスとクオンが最後の乗客らしい。
「ふう、やれやれ。セバスはもっと他人の迷惑というものを考えた方がいいな。世界はお前を中心に回ってなどいないぞ？」
「・・・・・・」
クオンを視察した揚句、親兄弟親類縁者に至るまで破滅に導いてやりたかったが、車掌の手前それはできなかったので予定を繰り越し、今は荷物をまとめることに専念するセバスだった。

ゲメーシッヒ　4

駅に人影は少ない。今列車に乗っていた乗客は全て出ていってしまっているし、次に列車が出るのは5日後だ。
「とりあえず泊まるところを探すか。・・・いや、違った。セバスちゃん。オジサンとホテルいこっかぁ？」
「偶然にも通行人が通りかかって通報されてしまえ」
険の込めた言葉を投げかけ、セバスは駅を出た。どうやらまだ機嫌は治らないらしい。こんなすぐに治るわけがないのだが。
「宿に当てはあるの？」
「ない。私だってこの街に来るのは初めてだ。だが、まあ見つからなくてもなんとかなるだろう。抱き合って温め合えば寒い夜でも乗りきれるものだぞ」
「・・・・・・っ！！」
おぞけが走った。そして気がつくとセバスの前には脛を抑えてうずくまるクオンの姿があった。どうやら無意識のうちに攻撃していたらしい。
「いや、してる！現在進行形でお前は私を蹴っているぞ！」
どうやら無意識のうちに連撃していたらしい。
「それは無意識ではない。・・・まったく、場を和ませようという私の優しさをお前はいつも踏みにじるのだから」
「和ませようとか考えるな！そんな暇がったら今すぐ消えろ！」
「オーケイ。任せろ、セバス。私は立派な透明人間になってみせる」
「それだけはやめろっ！！」
クオンを透明人間にするくらいなら殺人鬼を透明人間にする方が些かましというものだ。
クオンは立ちあがり、スーツの襟を正した。とりあえず駅の出口へと足を進めた。
「まあ、これだけの街だ。泊まる所などいくらでもある。ほら、あ

の3時間休憩で４０００円の所なんてどうだ？」
「前々から気になってたんだけどさ、どうしてあんな割高な所に泊まる人がいるのさ？」
「・・・・・・あー」
セバスはピュアな少女のようだ。
「そ、それはだな。リッチな気分に、なりたいんじゃないのかな」
なんとなく優しい嘘をついてしまう。クオンにとってこれは初めての試みと言えた。
「我々は経費が出ているとはいえ裕福というわけでもない。少し安っぽい所になるが我慢するんだぞ」
「別にいいよ。クフォンと別々の部屋なら」
「ふざけるな！」
「お前がふざけんな！！」
セバスはクオンの胸倉を掴む。・・・掴もうとしたが身長差により、腹倉しかつかめなかった。
「いや、肉！腹の肉を掴んでいるぞ！」
痛そうにそう叫んだクオンにセバスはにやりと笑いかけた。
「ぷ、腹に贅肉がある。おっさんだな」
「ほう・・・。セバスはおっさんの腹を触ったことがあるのか。経験豊富でよいことだな」
「ちっ、違う！ただの知識だっ！」
「ほう・・・。セバスはおっさんの腹には贅肉があることを知っているのか。いや、調べた事があるのか？そうかそうか、そこまでしておっさんの事が知りたかったか」
「あああああああっ！！一度でいいからこいつの半ベソが見てみたい！！」
セバスは怒鳴ったが、彼女のその短気さを鑑みる限り、それはなかなか実現しそうにない。
駅を出てもあまり人の姿は見受けられなかった。ちらほらと歩く人がいるが、少なくともクオン達のように大きな荷物を持った人はい

ない。理由は間違いなく治安だろう。駅近くには旅人を狙った強盗やスリが多い。もう少し郊外まで歩けば人はいるだろうが、そこでもやはり大きな荷物を持っているのは危険以外の何物でもない。
「2部屋取れなかったら別の宿にしようというかそうしよう、ぜひそうしよう・・・ってクフォン？」
目を放している隙にどこかへ行ってしまったらしい。
「おっほん。ご婦人よ、今夜止まる所がなくて困っている旅人なのだが、あなたの家を間借りできないだろうか」
女性を口説いていた。
「お前はイノシシと間違えられて誤射されろ！」
セバスは背後から膝に蹴りを入れた。クオンの膝がかくんと折れた。
「うわああ！膝が、膝が骨折したー！」
「ただの関節だ！それともそこに可動部がないとでも言うのか！？」
「おっと、失礼。私の背後に何やら小動物がいるようだが、心配ない。人違いだ。どうだろう？あなたの部屋を貸していただけないだろうか」
「おかしいおかしいおかしいおかしい！なんでそんなそこはかとなく犯罪臭を漂わせるのさ！」
「大丈夫だ何も起きない。仮に何かが起きたとしても私はこう言うだろう。『それでも私はやってない』」
「カバーのついてない扇風機に指突っ込めよ、このド変態！」
女性はクオンとセバスを交互にじろじろ見て、足早に去って行った。その背中を見ながらクオンがため息をつく。
「どうしてお前はいつもいつも私の結婚を邪魔しようとするのだ」
「結婚？結婚までこじつけるつもりだったの？」
「まあ、3日で離婚するがな」
「ただの間借りする最低な男じゃん、それ！」
セバスは1つ溜息をついて荷物を転がしながら道を行く。石畳に幾度となくキャスターが引っ掛かるのでスピードは遅く、すぐにクオンが追い付いてきた。

「ついてくるな！お前といると全然話が進まない！」
「ばかめ。セバスがいく全ての所に私が先回りしていてやる。一周してセバスがストーカー、みたいになればいい」
「じゃあ僕はその行動を逐一読んで別の場所に言ってやる。クフォンは僕が来ないまま野垂れ死ぬまで待ち続ければいいんだ」
「いや、私はすぐ飽きる」
「ただの悪ふざけかっ！」
セバスの足はどんどん速くなっていく。いつの間にか駅前通りを抜け、中心街へと足を踏み入れていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7057u/

静かな世界のマエストーソ

2011年10月9日00時29分発行